

令和5年度川口賞報告書

報告者：鈴木偉久 (名古屋大学生命農学研究科)

参加学会：Neuroscience 2023 (Society for Neuroscience)

開催場所：Washington, D.C., United States of America

日程：2023年11月11日-15日

発表数：口頭発表 約1200件、ポスター発表：11206件、参加者25808名

参加報告

私が博士後期課程に進学した2020年に蔓延した疫病によって国際的な移動が制限され、多くの同世代の学生は対面の国際学会に参加できずに卒業しました。幸か不幸か、私は卒業が1年遅れたため、在学中に対面での国際学会に参加することができました。私の周りに国際学会参加について相談できる人が少なく、学会にも単身で参加したため、苦労しました。本報告書が学生の国際学会発表の一助となれたら幸いです。

私が参加した北米神経科学会(Society for Neuroscience; SfN)は神経科学を研究対象とし、約3万人が参加する大規模な国際学会です。ホテルから会場への道中は参加者で埋め尽くされ、会場内で議論する何万もの研究者の熱を肌で感じました。発表演題数も多く、複数の口頭発表セッションとポスター発表が並行して対面で行われていました(ポスター発表は半日ごとに入れ替わる)。気になる発表を聞くために、前日にSfNのアプリで確認した演題情報を頼りに、3ブロックにまたがる会場を朝から晩まで縦横無尽に駆け回りました。この時ほど「分裂して参加できたら」と思ったことはありません。

SfNでは主にモデル生物を用いた神経科学の最先端の研究発表が行われており、画像解析やイメージング等の手法に関する知見を得る事ができました。非モデル生物を用いた研究も少なからずあり、各実験手法を研究対象に適応するTipsを教えてくださいました。私は「フグ毒(テトロドトキシン; TTX)類縁体に対するフグの嗅覚感知」に関する研究でポスター発表を行いました。日本においてTTXは良く知られていますが、神経科学分野においてTTXは電位依存性Na⁺チャネルの阻害剤として有名です。そのため、TTX類縁体が匂い物質としてはたらくことに興味を持っていただき、活発な議論を行うことができました。他にもCa²⁺イメージングやエレクトロポレーション等のテクニカルな質問を多く頂きました。普段、発表を行う日本動物学会とは異なる毛色の質問も多く受けましたが、背景知識をすり合わせながら丁寧に議論できることは対面学会の良さだと改めて感じました。

また、学会発表を通じて多くの研究者と交流することができました。会場外でも同じホテルに宿泊していた在米中国人研究者の方に夕食をご馳走になったり、在米日本人研究者の集まりに呼んでいただいたりして、キャリアや留学について相談することができました。現地で研究発表をできたおかげでこのような交流ができ、大変有意義な学会参加となりました。今回、発表を支援していただいた日本動物学会の関係者各位に心より感謝申し上げます。